

日本体育大学同窓会誌

日体人

NITTAI-JIN 2013. autumn Vol.2

祝
2020年東京
オリンピック
開催

CONTENTS

- 「特集 日体大の「勢い」」
箱根連続制覇に向かってひた走る 駅伝部
躍進するクラブ・サークル
「世界一の体育大学」への道を着々と歩む
「反体罰・反暴力宣言」を語る
「支部活動Highlight①」「県人会」活動
「活躍してます！ 日体大OB」 倉田昭人さん
「支部活動Highlight②」「かながわ日体未来塾」

14 12 11 8 6 4 2

特集

日体大の
「勢い」

箱根連続制覇に向かって ひた走る



日本体育大学 駅伝部

2013年、日体大を愛する者たちは誠に幸せな正月を過ごした。まさかの箱根駅伝30年ぶりの総合優勝。しかも往路優勝、復路は1位を譲ることなくゴールまで突っ走るといふ胸のすくような勝ちっぷり。まさに今の日体大の「勢い」を象徴するような快走だった。すでに新しいシーズンに照準を定め、「勝負は連覇のかかる今年」と言う別府監督、服部主将にお話を伺った。

2013年初夏、日本体育大学横浜・健志台キャンパスの陸上競技場。雨が降りしきるトラックを駆け抜けているのは陸上競技部・駅伝チームだ。全員によるウォーミングアップで先頭に立っているのは、エースで主将の服部翔大選手。今年の箱根駅伝で見事な復活劇を成し遂げた「3年生主将」として、全国にその名を知らしめた。そしてトラック脇では、別府健至監督が厳しいまなざしで選手



たちの走りを追っている。2人が見据えるのは秋の出雲駅伝、全日本大学駅伝、そしてもちろん、箱根駅伝連覇である。

前例のない「3年生主将」が見事に示したキャプテンシー

前回、2012年正月の箱根で、日体大は過去最低の19位と惨敗、64回つなぎ続けた伝統のタスキが初めて途切れた。

「チーム力に少し弱いところはありましたが、経験もあるし、何とかいけるだろうと、私も選手たちも甘い考えていたことは否めません」と語る別府監督。

チームにも自分にも活を入れねば



ならぬと打った手が、当時2年だった服部選手の主将指名だった。運動部の慣例である年功序列をひっくり返す決断で、監督は自らの「本気」を示した。

「服部はただ速いだけでなく、どんな状況にあっても走れる強いメンタルを持った選手です。2年間で仲間の信頼も得ていましたから、上級生がいる状況でも彼が最も主将にふさわしいと考えました」

不意打ちの指名に服部選手は、「正直、驚きました。上級生の方もいる中でチームをまとめられるのか、不安は当然ありました。それでも4月には、4年生の方たちは『服部を支えてやろう』って言ってくださいましたし、同級生も『おまえに付い

ていくよ』と。それで自分も『やってやろう、チームを立て直そう』という気持ちになりました。当初は空回りした部分もあったと思いますが、主将として苦勞した覚えはありません』と言う。

服部主将のもとに結束を固めていった日体大は、秋の予選会を1位で難なく通過。そして本戦、日体大ファンを興奮の渦に巻き込んだあの怒涛の山登りで、服部は区間賞とともに往路優勝のテープを切り、大会最優秀選手に贈られる「金栗四三杯」も授賞した。チームの結果に加えて、実力でも見事なキャプテンシーを示したのである。

あの抜群の「安定感」はどこから生まれたのか

優勝メンバーの7人が残り、「山の星」（服部主将が自ら命名）服部君もいるし、今シーズンも期待できますねというこちらの問いかけに、別府監督は首をかしげる。

「昨年のような、どん底からなんとしてでも這い上がろうというモチベーションは持てません。また周囲の期待は大きく、それに応えなければならないという新たなプレッシャーが選手たちにのしかかります。正直、かなり厳しいと思っています。何をもって選手たちの集中力を引き出し、維持させるのか。やはり、昨年から取り組んでいる『基本の徹底』をさらに押し進められるかが鍵になると思います」

日体大の今回の総合優勝の源は、その「安定感」にある。強い向かい風と寒さの中で有力校にもアクシデントが続出する中、日体大は10人全員が実力通り、あるいはそれ以上の力を出して走り切った。プレーキ区間はなし。そのような安定した走りを実現したのが「基本の徹底」だったと監督は言う。



第89回箱根駅伝。10区・谷永雄一は、胸の「日本体育大学」の文字を大きくアピールし、力強いガッツポーズとともにテープを切った。「復路優勝も頭をよぎりましたが、無理はさせませんでした（復路2位）」と別府監督

「新しく体幹を鍛えるトレーニングは取り入れましたが、練習の量や方法は特に変えていません。ただし、準備運動や補強運動などの基本メニューを流すことなく、一つ一つ意識をもってやるようにしました。また、大きかったのは、日常生活の見直しでした」

箱根連覇への鍵は ひたすらに「基本の徹底」

別府監督の西脇工高時代の恩師、渡辺公二氏がアドバイザーとしてチームに加わり、生活面での「基本の徹底」に取り組んだ。指導されたのは、何があろうと夜10時半の消灯を厳守、栄養を考えて食事を摂り、食べ残さない、練習はまずグラウンドの掃除から始める、礼儀正しくといった当たり前のことばかり。

「その当たり前のことをしっかりとやっていくうちに、皆が自分の足場にきちっと立ったというか、地に足をつけて練習できるようになったんです。集中力が高まり、安定した走りができるようになりました」と服部主将は言う。

最後に箱根連覇への意気込みを伺った。

「練習や日常生活における『基本の徹底』は、まだ途上です。この精度を高めつつ、モチベーションを維持していければ、厳しいながらも道は開けてくるはずですよ」と監督。

「大事なことは今年。真の実力が問

われます。気を緩めることなく、『今年も優勝してやる』という強い気持ちと勢いを持って、秋のシーズンを迎えたいと思います」と「山の星」。

整理整頓された待機所、清掃の行き届いたグラウンド、トラックへ入りするたびの一礼、きちんと交わされる挨拶。そして降り止まぬ雨の中、選手たちは走り続ける。どの選手もひとと前を見つめ、視線は揺るがない。この1年で彼らが身につけたものの大きさを感じさせる情景だった。

別府監督（右）と服部主将。服部は1年の時から5区志望。監督も5区での起用を考えていたが、チーム事情で実現しなかった。満を持しての今回、服部は強風の中のデッドヒートを制し、山登りの才能を遺憾なく発揮した



躍進するクラブ・サークル

あまりにも鮮やかに箱根を制した駅伝部に目を奪われがちだが、日体大の誇る76のクラブ・サークルも今、それぞれに「勢い」を見せている。2012年度には、実に27ものチームが全国大会優勝を成し遂げた。ロンドンオリンピックにおける日体大OB・現役学生たちの活躍、次々に入學してくるワールドクラスの選手たちの存在が、大きな刺激となって彼らに力をもたらししているのか。
躍進するクラブ・サークルの一部を、いただいたメッセージとともに紹介する。



ハンドボール部

男子は全日本インカレ11年連続決勝進出で優勝8回。ただしインカレは通過点に過ぎず、目標は全日本総合選手権での決勝進出です。速攻から繰り広げられるスピードあふれるプレーをぜひご覧ください。女子は「走るハンドボール」で日体大復活を目指しています。

2012年度戦績

- 関東学生春季リーグ戦：男子優勝・女子3位
- 関東学生秋季リーグ戦：男子優勝・女子4位
- 全日本学生選手権大会：男子優勝・女子ベスト8
- 全日本総合選手権大会：男子ベスト16

ソフトボール部



今シーズンの目標は、男女ともに全日本大学選手権大会での優勝です。男女アベック優勝は1997年以来達成できていないため、今年こそ成し遂げたいと思っています。ご声援よろしくお願いたします。

2012年度戦績

- 東日本大学選手権大会：男子準優勝
- 全日本総合選手権大会：男子3位
- 全日本大学選手権大会：女子3位
- 東京都大学ソフトボール連盟秋季リーグ戦：男子・女子 優勝

Hot Athlete!

スキー部
青野 令 (社会体育学科1年)

2013年4月よりスキー部に加入した、バンクーバーオリンピックスノーボード・ハーフパイプ9位の青野令。外見とは全く異なった性格を持つ選手。常にけがを抱えながら黙々と練習をこなし、世界のトップランクに君臨する姿は他の学生へ刺激を与える存在です。
(学友会スキー部 部長 野村 一路)

2012年度戦績

- 2013-14 全日本スキー連盟強化指定選手 ナショナルA指定選手
- 2012 FIS WORLD CUP初戦：優勝
- 2012 Burton High Fives：2位



バドミントン部



男女ともインカレ団体の連続優勝を目標としています。将来性豊かな下級生を試合に出場させ選手層の厚みを増すことに積極的。一方で心理学的サポートおよびトレーナーサポートを充実させ、さらなる飛躍を目指しています。

2012年度戦績

- ロンドンオリンピック：女子シングルス ベスト16 (佐藤冴香4年)
- 秋季リーグ戦：男子・女子 優勝
- 全日本インカレ団体：男子 (2年連続)・女子 優勝
- 全日本インカレ個人：男子・シングルス優勝、ダブルス準優勝
- 2013年春季リーグ戦：男子・女子 準優勝

スカッシュ同好会



2012年度は女子の活躍により素晴らしい成績を残すことができました。今年は男子も着実に力をつけ、男女ともに上を狙える選手が増えています。去年より多くの選手が表彰台に立つことを目標に頑張ります。応援よろしくお願いたします。

2012年度戦績

- 全日本学生スカッシュ選手権大会個人戦：女子準優勝、3位、4位
- 団体戦：女子優勝
- 新人の部：女子優勝

硬式野球部



強化指定運動部である硬式野球部は、2013年春の首都大学野球リーグ戦において優勝。全日本大学野球選手権においてベスト4に入り着々と力をつけています。2013年のチームスローガンは「結束」。全国制覇を目指して頑張ります。

2012年度戦績

- 首都大学野球春季リーグ戦：6位
- 首都大学野球秋季リーグ戦：4位

Hot Athlete!

水泳部 飛込ブロック
坂井 丞 (体育学科3年)



坂井選手は、幼少時から日体大飛込競技の歴史と伝統に触れて成長し、今や史上最高の飛込技術とともに確かな世界基準をもたらす選手に進化してくれました。それに伴い、チーム全体の技術水準も飛躍的に向上しています。今後も、目標を遂げなが

ら夢を追い、拠り所である日体大飛込ブロックの確固たる一時代を築いてほしいと想ってやみません。
(学友会水泳部 部長 大本 洋嗣)

2012年度戦績

(競技種目はすべて男子3m.飛板飛込)

- FINAダイビングワールドカップ (ロンドン)：7位入賞
- FINAダイビンググランプリ イタリア大会：優勝
- 2012年度 飛込国際大会派遣選手選考会：優勝
- FINAダイビンググランプリ カナダ大会：準優勝
- 2013年世界水泳選手権 (バルセロナ)：8位入賞

レスリング部



レスリング部は常に「世界で勝つ」ことを目的として、日々の練習に取り組んでいます。2013年度は、学生のオリンピックでもあるユニバーシアード大会において森下史崇選手(4年生)が銅メダル獲得という好成績を残しました。

2012年度戦績

- 東日本学生リーグ戦：総合優勝 (5年ぶり26回目)
 - 全日本大学グレコローマスタイル選手権：総合2位
 - 全日本大学選手権：総合5位
 - 2013年東日本学生リーグ戦：リーグ3位
- ※個人戦でも数多くの選手が活躍しています

ダブルダッチサークル



現在部員100名余り、創部16年目を迎えるサークルです。2本の縄を使って縄跳びの技と表現力を競うダブルダッチは、誰にでも世界一を獲得するチャンスがあるスポーツ。部員全員が世界チャンピオンを目指して日々切磋琢磨しています。

2012年度戦績

- 世界選手権大会：優勝
- DOUBLE DUTCH HOLIDAY CLASSIC (世界選手権)：準優勝
- DOUBLE DUTCH DELIGHT JAPAN 2012 (全日本学生選手権)：優勝
- Japan open'13 (日本選手権)：優勝

セパタクロー同好会



多くのOB、OG、現役選手が日本代表、候補生に選ばれており、日本のセパタクローをけん引する大学との自覚をもって練習に取り組んでいます。2013年度はJOCジュニアオリンピックカップで男女アベック優勝3連覇を果たしました。

2012年度戦績

- 全日本学生セパタクローオープン選手権大会：男子準優勝・女子優勝
- 全日本学生セパタクロー選手権大会：男子準優勝・女子優勝
- 2013年度全日本学生セパタクローオープン選手権大会：男子準優勝・女子優勝

アメリカンフットボール部

2013年度春シーズンを通じ選手が自主性・主体性を高め、各々がチームの戦力となるように自覚し、これからの秋シーズンを迎えます。チーム目標は日本一。そのためにまずは秋季リーグ戦ブロック優勝を目標として日々練習に取り組んでいます。

2012年度戦績

- 関東学生アメリカンフットボール連盟 秋季リーグ戦：1部Aブロック3位



「世界一の体育大学」への道を 着々と歩む

インタビュー 学校法人日本体育大学 理事長 松浪 健四郎

今の日体大の「勢い」を、松浪理事長が次々に打ち出す「挑戦」の数々を抜きに語るのは難しい。初の学部増設、障がい者への教育、さらには産学連携によるF1参戦まで、柔軟で、勇気あるチャレンジが続いている。身体にまつわるすべてのジャンルで優れた指導者を輩出する「世界一の体育大学」への道が、確かに、少しずつ見えてきた。

開学以来約120年で 初めての学部増設

——昨年11月に発行した「日體人」創刊号で、松浪理事長は「日体大は世界一の体育大学になります」と高らかに宣言されました。すでにこの4月には「児童スポーツ教育学部」が初めての新生を迎え、来年度には「保健医療学部」もスタートして、日体大は3学部を有する大学となります。昨年構想として語られたことが次々に実現されていく、そのスピードには驚きを禁じえません。

松浪 開学以来約120年で初めてとなる学部増設。しかもこの2年で一気に2学部を開設します。「世界一の体育大学」になるには、身体に関わるすべてのジャンルにおいて指導者を養成することが求められます。そこに向けてのさまざまな取り組みを進めているところです。

——その第一弾が、保育園や幼稚園、小学校の先生を養成する「児童スポーツ教育学部」ですね。改めて創設の狙い、展望などお聞かせください。

松浪 まず第一に、日本の児童の体力の低下や運動離れに歯止めをかけたい。そのためにスポーツが好きで、子どもたちをきちんと指導できる先

生を育成しようということです。

二番目は、国民が生まれてから亡くなるまでの身体と健康について、本学が一貫して関わり、指導をしていきたいということ。今まで欠けていた小学校・幼稚園の部分を補完し、まさに生まれたときから高齢になるまでをずっと見守っていく体制が整いました。

——新学部創設で、日体大のブランド力はさらに高まっていくと思われます。また、年頭の箱根駅伝制覇はもとより、多くのスポーツでいい成績を収められていて……なんというか、日体大は今、元気があります。

松浪 そうですね、勢いを感じます。まあ今年は箱根が弾みをつけてくれたという気もしますけれど。また全国の日体大卒業生が愛校心をちよつと膨らませてくれたのではないかと感じています。箱根の応援も素晴らしいものでしたし、私は各地の同窓会へ出かけていきますが、参加者が年を追うごとに増えています。——学生がいい成績を収めると全国のOBを含めて愛校心が高まり、母校に思いを結集する。それに後押しされて学生たちがさらに力を発揮する。そういう好循環がぐるぐる回ってくると、その先に「世界一の体育大学」が現実のものとして見えてきそうですね。

松浪 名実ともに「世界一の体育大学」となるには、まだまだ時間がかかります。身体にまつわる科学と文

化の総合大学でありながら、我々は医学部を持っていませんし。ですからたくさんの同窓の皆さんの力をお借りして、また知恵もお借りして、少しずつ「世界一」に近づいていきたいと思っています。

絶えず「挑戦」する 体育大学であり続けたい

——そして来年度には「保健医療学部」がスタートします。

松浪 スポーツの専門性を備えた医療の担い手を育てることを目指し、柔道整復師や救急救命士などを養成します。将来はリハビリテーションや看護、歯科衛生などのコースも視野に入れています。

——可能性のある分野については、順次手がけていく？

松浪 ええ、間髪入れずに。

——そのへんの実行力は、さすがですね。

松浪 今の時代状況、今後の高齢化社会を睨むとき、体育大学がどうしてもいけなければいけないのは自ずと分かってきます。あぐらをかいていてうまくいくわけがないんです。「改革」というよりは、「挑戦」する体育大学であり続けたいと思いますね。

——北海道で知的障がいをもつ生徒が自立するための高校を作ろうとされています。これも大きな「挑戦」ですね。

松浪 我々は健康者だけではなく、いろんな子どもたちにスポーツのお



金日成スタジアム、4万人の声援の中で行われた
朝鮮体育大学とのサッカー親善試合

もしろさ、楽しさを与えていかねばならない。これは新しいスポーツ基本法の中にも書き込まれていることです。アメリカでは教員養成の大学には必ず付属のハンディキャップスクールがあります。本学でもとつくに障がい者の学校を持って、学生たちがそこで実習をするということで特別支援教員の免許を取得させなければいけなかったんです。それを今回ようやく、北海道網走市のご協力をいただいて実現します。1学年40名で全寮制。網走・北見の同窓の皆さんの協力をいただきながら進めており、2016年に開校予定です。——F1のレースに大学として関わっていられるというお話もあります。

松浪 トヨタ自動車と縁がありまして、さまざまに連携しながら「モータースポーツコース」という形でやっていこうと考えています。日体大生ですから、動体視力は素晴らしい、運動神経も素晴らしい、勇気もある。我々だってレーサーをつくるのが可能ではないのかということです。

——画期的ですね、体育大学がそこまでやるというのは。いつから？

松浪 来年度から始めます。産学官の連携は本学にとっても重要なテーマです。官学連携としては、JICA(国際協力機構)との提携による日体大生の海外派遣が進んでいますが、このモータースポーツへの参戦は、産学連携の大きな1歩となるはずです。

「世に先がけて獅子吼する」 その精神を忘れることなく

——驚いたといえば、2012年11月に朝鮮民主主義人民共和国へ行き、日体大と朝鮮体育大学のスポーツ交流を行われました。サッカー、レスリング、柔道の親善試合には大勢の観客が訪れたと聞いています。なぜ今、北朝鮮に行かれたのか。



日体大のシンボルアニマル「獅子」の像の前で(世田谷キャンパス)。日体大ワンファミリー化の象徴として2013年春、日体荏原高等学校、柏日体高等学校、日本柔整専門学校にも獅子の像が設置された(浜松日体は校舎建て替え後に設置予定)

松浪 日体大の建学の精神には、その社会的使命として「スポーツの『力』を基軸に、国際平和に寄与する」と明記されています。また学生寮歌には「眠れる魂を醒ましんと世に先がけて獅子吼する」とあります。皆、北朝鮮とは国交ができないと決めこんで何もしない。我々は世に先がけてやるということです。

拉致の問題を解決しないかぎり前に進まないというのではなく、できることはやって最終的に相互の理解を深め、重要課題を処理していくという手法の方が賢明だと私は考えています。我々の訪朝の目的は、若者たちがスポーツを通して交流すること。そしてスポーツには万民の心を動かす力があります。

また、北朝鮮には本学の卒業生がたくさんいらっしゃいます。その消息を尋ねるというのも訪朝の理由の1つでした。同窓会長とともに、そ

の旨を北朝鮮政府に申し上げました。——最後に、同窓の皆さんへのメッセージをお願いします。

松浪 「世界一の体育大学」を目指す日体大ではありますが、まずは、同窓の皆さんに胸を張って「私は日体大の卒業生です」と言ってもらえるようにしたい。肩身の狭い大学じゃだめです。今年は特に、体罰問題でOBがメディアに取り上げられて、皆さんそれぞれに苦労がおりだったと思います。

——あの時は日体大が先陣を切るように堂々と「反体罰宣言」を出されて、大変な勇気だったと思います。

松浪 日体大は変わりますよ。強いアスリートを育てる一方で、視野を広げ、時代と社会を見すえて、さまざまなことに果敢に「挑戦」していきます。同窓の皆さんにもなにとぞご理解とご協力をいただきたく、お願いいたします。



現場で頑張っておられる皆さんの母校であるからこそ 先んじて反体罰・反暴力を宣言しなければならなかった

インタビュー 日本体育大学 学長 谷釜 了正

聞き手 日本体育大学同窓会 幹事長 鈴木 洋祐

「教育活動及びスポーツ指導活動において、いかなる事情があろうとも体罰・パワーハラスメント等の暴力についてはこれを排除します」——日本体育大学が2013年2月に出した「反体罰・反暴力宣言」。同窓の皆さんは、さまざまな思いでこれを受け止められたと思う。悩みぬいた末にこの宣言を発し、断固としてこれに取り組む覚悟を定めたという谷釜学長に、その経緯、現況、そして同窓への思いを伺った。

体罰はどこから始まり、そして なぜなかなか無くならないのか

鈴木 昨年12月以来、体罰問題への社会の関心が高まる中で、谷釜学長は2月には日体大として「反体罰・反暴力宣言」を掲げ、4月には本学入学式に先立って、全新生と保護者を前に断固としてこれに取り組むことを明確に打ち出されました。私もそこに参列していて、学長の決意、勇気に変感激しました。

今日は「反体罰・反暴力宣言」を中心にお話を伺っていきたくと思いますが、まずは一般論として、今日に至る日本のスポーツ界において選手強化の際に行われてきた体罰容認について、どのように考えておられるかお聞かせください。

谷釜 日本の学校教育の中で、体罰を教育界そのものが容認してきたという歴史があるのではないのでしょうか。体育に体罰が行使されるようになったのは明治19年に森有礼文相が施行した学校令以降ではないかと思います。この時、現在の中学校に当たる高等小学校の体育教材として、きちんと行進ができるようになる「隊列運動」が採用されます。

鈴木 日体大で言う「集団行動」、あれがその一つの

名残ですね。今では見せどころ満載のパフォーマンスとして、「自分の身を守る」といった今日的な目的のもとに行われています。

谷釜 そうです。それを体育教師ではなく退役軍人が教えるようになり、この時に軍隊的規律が求められて、体罰が正当化されていきました。さらに現在の高等学校に当たる中等学校では、兵式体操教材として軍事教練が実施され、軍事的予備教育としての色合いを深めています。この時に体罰と無縁の指導が行われたとは思えません。明治33年に学校令が少し変わり、「体罰はだめ」が「懲戒ならいい、体罰ならだめ」となりました。戦後にスタートした学校教育法でもその文言をそのまま引きずって、つまり「懲戒」の部分で叩いていたんです。今は、文科省や各教育委員会が、ここまでは懲戒だけど、ここからは体罰だからいけないというガイドラインのようなものを出しています。

鈴木 今、学長のお話を聞いていて、「退役軍人に始まる体罰」とか、今に続く「懲戒はいい」という文言、そのあたりに体育に関わる人間を迷わせる何かがあるのかなと思いました。例えば、教育実習の指導に行くと、今の先生方は始業時に子どもを立たせないんですね。座ったまま「これから始めます、礼」。なぜです

かと聞くと、「軍国主義に通じる」。

谷釜 それは大いなる誤解ですよ。

鈴木 誤解ですよ。僕は礼儀作法だと思っている。そこを短絡的に決め込みすぎではないか、一方でまた臆病になりすぎているのではないかと気になります。

学長 例えばプールでの授業。先生1～2人で20～30人の子どもたちを水の中に入れるってことは、これはもう命懸けの話でしょ。規律が守られないと命に係わる。そういう時に、どこまでが懲戒でどこからが体罰かなんて言うてはいられない。必要な時には躊躇なく指導していかねばなりません。

鈴木 僕が現役のときに学校内で体罰があり、教員を全員集めて、こういうことはやめようと話しましたが、「教員には懲戒権がある、それを行使したんだ」と。そういうことは今でも根強く残っているんです。

谷釜 その仕切りを法律でつけて、ただし体罰は認めないというやり方をしているから、その懲戒の部分が体罰のところに割り込んでいくんです。だから、松浪理事長ともよく話すんですが、そういう中途半端はいけないだと。体罰はだめ、だめなものはだめだと。あとは、子ども、生徒、学生というのは先生が預かっているんですから、その責任において全身全霊で取り組んでいくしかないんです。私はそう思っています。

「反体罰・反暴力宣言」で 日体大の姿勢を内外に示す

鈴木 体罰問題がクローズアップされる契機となったいくつかの事件で、その指導者が日体大出身であったことを、学長はどのように受け止められましたか？

谷釜 日体大としては、いかなる状況であろうと体罰を容認することはできません。ただ、本学を卒業した先生は、たいてい現場に行く選手と向き合います。義務ではないし、向き合わない教師たちもいるけれど、熱心に選手と向き合う。つまり向き合わないければ体罰はないんです。そこを忘れてはいけないと思っています。本学の卒業生には、自分の生活を後回しにしても学生指導に当たる人がやたら多いんです。そのことの是非は別として、そういった人達に支えられてきた日本のスポーツというものがある。もちろん、熱心だからといって体罰が許されるものではなく、それを根本的に改める方法を我々は考えていかねばなりません。現場の状況に目を向けることなく、ただ一括りに「暴力教師」と決めつけられることには疑問を感じます。正しい理由の究明があつてこそ、正しい

対策が生み出されるはずで、す。本学の卒業生に限らず、スポーツの指導者に対して人々にはもっと理解をしてほしいという思いが私にはあります。

鈴木 事件があつて2カ月後に、「反体罰・反暴力宣言」を掲げられました。このスピードには驚きました。

谷釜 まずは私自身の考えを固め、2月8日の教授会で宣言しました。それに対して異議の申し立てはなく、3日後の10日・月曜日にホームページに宣言文を掲載し、内外へ向けて大学の姿勢を示すことにしました。

日本のスポーツを底辺から支えてきたのが本学の卒業生であることは自明です。現場で頑張っておられる皆さんに失礼があつてはならないと思いつつも、皆さんの母校であるからこそ積極的に反体罰・反暴力を宣言しなければならませんでした。多くの同窓の皆さんは戸惑われたに違いありません。

鈴木 そうですね。体罰や暴力に頼らない指導者もたくさんいるわけですから、「なんだ、母校は自分たちも同じように扱うのか」というのはあつただろうし、「同窓の先生を大事にせず、大学の指針だけ一方的に伝えてどうするんだ」というのもあつたかもしれません。学長も悩まれたでしょう。

谷釜 はい、1カ月くらい悩みぬきました。眠れなかったですね。しかし、「学校教育法」で体罰が禁止されている以上、この法律を遵守しなければならないのが教育機関としての大学です。将来に向けて体育の教員を輩出していく本学は、この機会に改めて反体罰・反暴力を宣言する必要がありました。日体大の姿勢を外部から問われる前に示すことが大切であると考えました。文科省が体罰に対する全国調査を始め、「懲戒」と「体罰」に関して指針を提示し、都道府県の教育委員会もこれに倣い、さらに日本体育協会や各種の競技団体が反体罰宣言をして体罰の概念を提示するに至っています。本学が孤立するわけにはいきませんでした。

鈴木 宣言後の反応はいかがでしたか？

谷釜 ある意味渦中の日体大が宣言を出したということで、メディアの動きは早かったですね。朝日新聞、NHKなどに取り上げられて、全国的な反響がありました。また大学の中でもこの問題をしっかりと受け止めようとする雰囲気生まれ、学生も教職員も同じ危機意識を共有することができました。松浪理事長からは



「いかなる場合でも体罰はこれを許さない。懲戒処分をもって対応する」という内容の通達が教職員に出されています。大学も運動部を抱え、世界のトップアスリートを育成しようと頑張っている先生がたくさんいるわけですから、自らも襟を正さねばなりません。

体罰容認の考えは、4年間で キャンパスに捨てていってもらう

鈴木 今年入学してきた新入生へのアンケートでは、体罰を是認する意見も根強くあったそうですね。

谷釜 1～2割くらいの学生が「まあ、いいんじゃないの」と。自分を育ててくれた指導者を尊敬し、その先生が行使していた体罰なども容認しているんです。それで4年経って自分が指導者になった時には同じことをやるかもしれない。その連鎖は断ち切らねばなりません。体罰を容認する学生には、この4年間でその考えを大学のキャンパスに捨てていってもらう。捨てていかせるために我々が何をしていくかということです。

鈴木 「法律で禁じられている」だけでは抑止力として不十分でしょうね。

谷釜 そう、今年、私は1年生の「自校史」という授業科目に10コマをもらって体罰についての講義をしました。終了後に感想を書かせると、「それでも体罰容認」という学生がまだいる。1,500人中30人くらいはいたかもしれません。記名なので誰が書いているか分かるんですが。

鈴木 勇気があるというか、信じてやまないというか。

谷釜 そもそも我々が親しんでいる近代スポーツは、暴力や危険を排除して安全なものへと仕立て上げられたものです。体罰や暴力が介在したらスポーツはスポーツでなくなる。体罰や暴力に頼らない指導者こそ真のスポーツの指導者であるということを、授業などを通して徹底して伝えていきます。

鈴木 理念、そしてノウハウも必要ですね。

谷釜 人間ですから誰しもカッとなることはある。その感情をどのようにして律するか。人間は置かれた状



況によっては人を殺めることもあると認識させる倫理教育に力を入れたい。そして怒りの感情を抑制するセルフコントロールの方法を学校教育、特に指導者養成プログラムの中に入れていくことを考えています。

鈴木 運動部や寮などに今

も残ると思われる、上下関係による体罰・暴力についてはいかがでしょうか。

谷釜 6月には大学が公認する40の運動部を練習視察も兼ねてすべて回り、部員たちにこの宣言の意図を伝えて、先輩と後輩の良好な関係を築くように訴えました。さらに学生寮や合宿所の学生たちの生活に関して、学生寮は寮監に、合宿所は部長・監督・コーチに定期的に施設を巡回して、生活に乱れがないか、暴力事件が起きていないか、ちゃんと食事を摂っているかなども含めて1カ月に2回大学に報告してもらうようにしました。そういう取り組みをワンサイクル4年間というスパンで見直ししながら、続けていきます。

鈴木 宣言して、さまざまな施策を講じて、それでも体罰の根絶というのはまだまだ容易じゃありませんね。

谷釜 容易じゃないというか、根絶というのは相当難しいでしょうね。ただ、4年間を通して徹底して反体罰・反暴力を教えていけば、そういうところに身を置いた時に「あつ」と思いますよ。振り上げた手も降りるんじゃないですか。

また現場の指導者については、本学の姿勢をよく伝えるとともに、出身大学で10年ごとに講習を受けることを義務付ける10年更新制度に、反体罰を理解するプログラムを入れることができると考えています。現場の指導者たちが10年ぶりに母校に行ったら、こんな講習があつた、それだけで違いますよ。これは国と相談しなければなりません。

鈴木 確かに、同窓の現役の指導者たちに学長の思いをどう伝えていくかは重要ですね。

谷釜 まずはこのように同窓会誌でお伝える。大学の広報誌でも、定期的にこの問題を取り上げていきます。また今年は、私も同窓会のブロック会議にできるだけ参加し、「反体罰・反暴力宣言」の意図、そして自分の思いをきちんとお話しさせていただきたいと思っています。

鈴木 風化させない、ずっと継続して取り組んでいくということですね。

谷釜 世論調査では、体罰を容認するとの意見が6割を占めています。やがてメディアの関心が離れていった時、「多少の体罰ならいい」という考えが静かに蔓延して、指導の現場に及ばないとも限りません。今、スポーツ界全体で提起されている問題を風化させてはならない。日体大は決して後退することなく、学生たちに反体罰・反暴力の精神を浸透させていく覚悟です。

鈴木 学長のその一貫した強い思いは、必ず全国の同窓の胸に届くと思います。ありがとうございました。

同窓の絆を深め、学生たちの夢の実現を支援する「県人会」活動

宮崎県同窓会 県人会担当 米田 ゆかり

昭和40～50年代には自然発生的に開かれ、本県出身在学生の情報交換の場となっていた県人會も、学生寮に生活する者が減り、キャンパスが深沢・健志台に分かれたこともあり、徐々に参加者が減っていった。平成に入ってから、九州ブロック同窓会で合同の「県人會」を開催するなど、さまざまな手立てを試したが顕著な効果は表れなかった。そこで、平成15年度に宮崎県同窓会として、本県出身（本籍地・保護者居住地・本県高校出身）学生の状況把握と就職対策事業の効果の実施のために、保護者会・宮崎県人在京経営者会と協力し、改めて「学生県人會」を設立することにした。

考え抜いた十重二十重の作戦が学生たちを引き寄せた

本県出身学生を把握するため、県内高校へ日体大進学者の調査を行うとともに、大学から「都道府県別学籍名簿」をいただき「県人會名簿」を作成。今回も学生は興味を持ってくれないのではとの懸念はあったが、学生たちが充実した大学生活を送る上でも、卒業後の本県出身同窓の絆づくりの意味でもぜひとも成功させたいと考え、「出席したい」「参加しよう」「参加しなければならない」と思わせる方法を、当時在職中であった坂佳代子教授と検討を重ねながら実行に移した。

1. 参加料を無料（本県同窓会・保護者会で予算化）
2. 保護者および出身高校部顧問からの参加要請
3. 坂教授および本県出身大学院生からの直接電話
4. 「県人會」当日の部活動免除要請

（大学当局、各部部长・監督への委嘱状の発送）

5. 研修会講師依頼および就職対策資料などの充実
6. 懇親会会場確保および余興出演者依頼

など十重二十重の作戦を展開。最終的には当時在籍33名中26名が出席してくれた。

熱く、温かく、なごやかに語り合う「県人會」昨年は、学生たちが自主的に開催

ここ数年は、卒業式前に設定して、できるだけ4年生が参加できるようにし、毎年おおよそ14～15人の出席がある。

卒業を前に4年生は進路や将来についての抱負、後輩たちへのメッセージなどを熱く語り、後輩たちも真剣に耳を傾けて、瞬く間に親睦が深まっていく。連絡先を交換し、誰もが笑顔、笑顔。会の終わりには、再会の約束を交わしながら別れを惜しむ姿が見られ、毎回「開催してよかった」という思いで帰途につく。

同窓会としては、同窓会の縦・横のつながりの大切さを伝え、また就職について同窓会組織を大いに利用してほしいと話している。まだまだ親睦会の域を抜け切れないが、昨年は学生同士が連絡を取り合い、自分たちの手で「県人會」を開催してくれた。今年もそのような動きがあると聞いている。

いつかは学生自らが会を運営し、それぞれが持つ現在、将来の課題を語り合いながら、解決の糸口を見いだせるような会にしていってほしいと願っている。夢を持って大学に入学した学生たちが、その夢を実現できるよう、保護者会・同窓会が連携してしっかりと「県人會」を支援していきたい。そして大学にも「県人會」への理解と協力をお願いしたいと思います。



学生たちが自主的に開催してくれた県人會（2013年3月8日）

同窓会誌発行協力金のお願い 郵便局の払込取扱票を添付

日本体育大学同窓会員及び関係の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

今回「日體人」の発行にあたり、益々の誌面充実を図りたく協力金を募ることにいたしました。

「日體人」は、同窓会の活動と母校の近況をお知らせし、会員相互の親睦を図り、母校とともに発展することを目的に発行しております。

つきましては、会誌発行についてもご支援を賜りたく2,000円の協力金をお願い申し上げます。

お手数とは存じますが、添付した払込取扱票（手数料不要）に必要事項（氏名・住所等）と備考欄に「卒業年（〇〇年3月、卒業生のみ）」をご記入のうえ、郵便局よりお振込お願い申し上げます。なお、ご協力いただいた方には、同窓会・大学の発行物等を送付させていただきます。 日本体育大学同窓会

正面からぶつかれば いつも道が開けた

神奈川新聞社 常務取締役 販売局長

倉田 昭人さん

日体大を巣立ち社会で活躍する同窓生の姿をレポートする。第1回は新聞記者として長くスポーツ報道に携わり、現在は常務取締役として新聞社経営にも関わる倉田昭人さん。スポーツの知識や競技者経験を生かし、独自の視点ですぐれた記事を執筆してきた。その裏には、挫折や失敗にも正面から向き合う姿勢があった。

Profile

くらたあきひと：昭和36年生まれ。昭和59年日本体育大学体育学部卒業。平成元年神奈川新聞社入社。編集局運動部記者として、平成10年世界陸上東京大会、長野冬季五輪、横浜高校春夏甲子園連覇、横浜ベイスターズ優勝、平成12年サッカー欧州選手権（オランダ、ベルギー）等を取材。編集局報道部を経て販売局へ。平成25年6月より現職。



1年生のときけがで野球を断念 2年生からゴルフ部に

「小中高と野球部で、神奈川県立白山高校でも野球部に入りました。新設校なので、まだグラウンドも整備されていない状態でした」

だが、運命の出会いがあった。

「担任だった体育の先生です。20代でバイタリティーとリーダーシップがあり、いろいろな話を聞くうち、体育教師になりたいと思うようになりました」

昭和55年、日体大体育学部に入學し、やはり野球部に入ったものの1年生の夏にけがで退部。「日体大に入った以上何かスポーツを続けようと思い、2年生のときゴルフ部に入りました。ゴルフなら大学から始めた人が多いのではと思ったからです。でも甘かった。部員はジュニア選手だった人ばかりでした」

その中で練習を重ね、3年生の春にはレギュラーの座を獲得。チームは、関東学生ゴルフ連盟のリーグ戦

でCブロックからAブロックに昇格した。「ゴルフ部に入るという決断をしてよかった。いい仲間ができ、充実した学生時代を過ごせました」

全力を尽くして 競技した者への敬意

教員になるのがずっと夢だったが、神奈川県の教員採用試験に合格せず、卒業後は母校・白山高校と県立港北高校で体育科の非常勤講師となった。母校では野球部の監督も務めた。

採用試験に毎年落ち続けた5年目、転機が訪れた。夏の高校野球県大会で母校が強豪・法政二高と対戦。接戦の末負けた試合を、神奈川新聞が詳しく記事にしたのだ。部員はそれを拡大コピーして部室に貼った。

「彼らはその記事をお守りのように大切にし、励みにしていました。『おれたちみたいな弱小チームでも頑張れば認めてもらえるんだ』って。その姿を見て、こうした生徒たちのことを伝えたい、彼らの希望となるような記事を書きたい。そんな思い

が湧き上がりました」。そして神奈川新聞社への入社試験を受験。面接では「高校野球の記事を書きたいんです。それがダメなら落としてください」と言い切ったそうだ。

平成元年、同社に入社。希望通り運動部に配属されたが、高校野球を始めとするアマチュアスポーツを取材する際、常に意識していたことがある。「勝者の記事であっても、敗者を傷つけないことです。例えば『手玉に取る』という表現。手玉に取られた相手はどう感じるでしょう。一生懸命練習してきたその頑張りや、新聞のたった1行が踏みにじることになる。アマチュアスポーツの記事では私はこうした表現を一切使いませんでした」

また試合後のコメントは、必ず敗者を先に聞きに行った。「負けた方には、負けた直後にしか出てこない言葉がある。その言葉を記事にしたかったんです」。全力を尽くして競技した者への敬意。それは日体大時代や教員時代に培われたと振り返る。

スポーツ記事を書かせれば 誰にも負けない

高校野球激戦区の神奈川県。強く印象に残るのは、平成10年に春夏連覇をした際の横浜高校だ。チームの要は松坂大輔投手。「入学直後、『10年に1人の逸材』と聞いて見に行くと本当にすごい。球の力が尋常じゃない。1年生の4月時点で記事にしました」。松坂投手のマスコミへの初登場だった。彼が3年生のとき同校は春夏連覇したが、その試合の終了後、ロッカールームに引き上げるナインを他社の記者とともに待っていたときのことだ。

「松坂投手が大勢の中から私を見つけ、手を差し伸べて『倉田さん、勝ちましたよ』と。地元紙の記者として本当にうれしかった」

スポーツ記事は、その競技や選手についての記者の知識や思い入れ、それまでどんな取材をしてきたかなどが記事に表れる。だから、体育大学出身で自身も競技経験があることは「大きなアドバンテージ」だった。

「たとえば、漠然と『あの打席はどうでしたか』と聞くのではなく、『あの球はたぶんスライダーでしたよね、狙っていたんですか』と踏み込んで聞ける。当然、返ってくる答えも具体的で踏み込んだものなので、記事に厚みが出る。スポーツの記事を書かせれば誰にも負けなかったと思っています」

ただし文章は少々苦労した。

「最初のころは原稿を書くとデスク（取材や編集の総括者）に真っ赤に添削されて戻されました。どこがどう違うのかを見比べて直していくうち、次第に赤が減っていきました」

時間との戦いもある。神奈川新聞の場合、朝刊に載せるには22時半が原稿の締め切りだ。「プロ野球の延長戦などでは、試合終了から締め



平成10年、高校野球・甲子園春夏連覇を達成した松坂大輔投手（現ニューヨーク・メッツ／後列右から2番目）ら横浜高校ナインと倉田記者（中央）。取材対象の選手と記念写真を撮ったのはこれが最初で最後。この写真は今も会社の仕事机に飾っている

切りまで20分しかないことも。だから、競技を見ながら頭の中で原稿を組み立てました。それを後でだ一つと文字にするんです。記事を書くのも競技者感覚でしたね」

人間、失敗しても 努力すれば必ず次がある

運動部に16年間勤務後、報道部で県警や司法のデスクを務めた。あるとき、事故の死亡者の氏名を誤って掲載したことがある。「記事を書いた記者と2人で謝罪に行くと、お通夜でした。ご遺族に『帰れ』と言われました」。後日再訪しても追いつ返された。「3度目は正直、気が重かった。でも記事を出したのは私の責任。神奈川新聞の信用問題にもかかわる。ここで行かずにどうする、と勇気を出しました」。すると「線香を上げていけ」と家に入れてくれた。「逃げないでよかった」と思ったそうだ。

正面から向き合えば道は開けると考えている。「そもそも私は『人生、中途採用』。野球ができなくなってもゴルフ、正規教員になれなくても新聞記者、と次の道が開けました。人間、失敗しても努力すれば必ず次

があります。とくに日体大生は気持ちが据わっているから大丈夫」

そんな日体大生には、就職先としてスポーツ報道もぜひ選択肢に入れてほしいという。

「スポーツの知識や経験を生かせるし、多くの人との出会いもある楽しい仕事。日体大生は能力も可能性もあるのだから、チャレンジしなきゃもったいない。『これをやりたい』という熱意をしっかりと相手にアピールしてください」

仕事以外では、神奈川県高校野球OB連合の会長でもある。「おじさんたちが一所懸命ボールを追う」姿に、スポーツのよさをあらためて感じるそうだ。「今後も何らかの形で野球に触れていたい」と、野球少年時代をほうふつさせる笑顔を見せた。



地域社会に根ざした紙面づくりが神奈川新聞の特徴。販売局は県内の新聞販売店と連携し、購読者拡大の支援をしたり読者の反応をキャッチしたりと、記者と販売店とを橋渡しする部署だ。それを統括・指揮する販売局長を平成23年から務める

充実した就職セミナーで大きな成果を生む 「かながわ日体未来塾」

神奈川県同窓会事務局 就職対策委員 改田 晃

「かながわ日体未来塾」とは、神奈川県出身あるいは神奈川での就職を目指している日体大生とその保護者を対象に行う就職セミナーです。神奈川県同窓会が何十年も行ってきたものですが、参加者募集の際にインパクトがあり、指導する側も「育てていこう」という意識を持てるよう、平成22年度より今のネーミングに改めました。「未来塾」としたのは、日体大生が希望する職業に就けるように研修する場であること、そして神奈川の将来を担う日体大生を育てる場であることなどによるものです。

教員採用試験での2次試験対策の徹底で 多くの現役合格者を輩出

「かながわ日体未来塾」は名前だけでなく、中身も変わりました。その大きな特長はセミナーの充実です。以前よりも多くのスタッフが運営に関わり、県同窓会として定期的に年2回、1回目と2回目でテーマを変えて実施しています。さらに各支部ごと（県内に10支部）にセミナーを開催し、地元出身の学生たちに細部にわたる指導を行っています。

2012年度の第1回の未来塾では、教員採用試験の1次試験合格者を対象に2次試験対策を行いました。21名の受講生が参加してくれましたが、指導スタッフを増やしたことで、より丁寧な指導を行うことができました。「未来塾」の成果と言えるかどうか分かりませんが、2012年3月卒業の日体大生で、公立学校の教員採用試験に現役合格した者の1/3以上を神奈川県が占め、2013年3月の卒業生でも1/5を超えています。

第2回は、1～4年生の学生（短大生含む）とその保護者を対象に実施しました。大学の就職担当の職員の方に講師をお願いするとともに、学生を採用する側の立場から、市役所勤務の同窓生、元教員採用に関わった同窓生、現役の会社社長の同窓生にも講師として加わってもらいました。また、採用になったばかりの若



模擬授業についての講義



模擬面接

い同窓生（教員・警察官・民間企業）を招いてパネルディスカッションを行い、就職に向けた準備から実際までどのようなことを行い、どのような点に注意すればよいかなどのお話をしてもらいました。参加した学生、保護者からは、役に立つ話が多く、受講して良かったとの声を数多く聞くことができました。

学生が求めているものは何か、 必要とするものは何かをよく考えて

開催案内や申込受付の方法をどのようにするか、支部ごとの「未来塾」開催をどうすれば増やしていけるかなど、検討すべき課題はまだあります。これからも、学生が求めているものは何か、必要とするものは何かをよく考え、大学の学生支援センターと連携しながら日体大生の就職を支援していきます。

「かながわ日体未来塾」と改めて3年が経過し、同窓会として学生を応援していこうという意識も少しずつ高まってきたと感じます。また近年、若い同窓生の入会、同窓会活動への参加が少なくなっていますが、「未来塾」を継続していくことで徐々に会員が増えていき、同窓会活動がより活発になることを期待しています。

編集後記

今年度も1回の発行となりました。今年は年頭早々日体が大きな話題となりました。そこで今回は、「頑張る日体」「躍進する日体」をテーマに編集しました。法人・大学・学生そして同窓生とみんなが頑張って日体を盛り立てているような気がします。そんな活力を皆様にお届けできればと思っています。（堀川政子）

大学に次ぐ歴史と伝統。大学への近道。

学校法人 日本体育大学

日体荏原高等学校

普通科・男女共学 生徒寮完備

総合 コース

体育 コース

文理 コース

〒146-8588 東京都大田区池上 8-26-1 Tel 03-3759-3291 Fax 03-3759-3614

<http://www.nittai-ebara.jp/>

柏日体高等学校

学校法人 日本体育大学

〒277-0008 千葉県柏市戸張 944
TEL 04-7167-1301 FAX 04-7167-5338
<http://www.k-nittai.ed.jp>



校長 鈴木誠治

柏日体高校は「文武両道」の教育方針の基、“進学実績の躍進”と“スポーツの振興”を使命とし、その実践を図っています。本校では自ら進んで勉強と部活動に挑戦する者には、将来の大きな成長を約束します。

精神と肉体を鍛え、競技力の向上と人間力を高めていくことを目標に、優れた人材の育成を目指していきます。

※平成26年度より「文理特進コース」から名称変更
アドバンスコース

難関大学現役合格を目指す

進学コース

文系・理系・私立現役合格を目指す

※平成26年度より「スポーツコース」から名称変更
アスリートコース

世界で競い合うトップアスリートの養成を目指す

全国大会出場 強化指定部

陸上競技部・駅伝競走部・サッカー部・野球部・男子バスケットボール部・相撲部・ラグビー部・空手道部

新しいステージへ 平成26年度から新校舎着工

- ◆IT環境を盛り込んだ中庭付の新校舎
- ◆自学自習をサポートする
新個別学習支援センターの開設
- ◆全天候型(タータン人工芝)グラウンド



※完成予定図

健信寮



Kashiwa Nittai High School.

なつかしい母校のグッズをお手元に、いかがですか？

同窓会グッズ

※価格はすべて税込です



- ① テディベア(チョコ/ゴールド) Lサイズ(約25cm) 各2,500円
② テディベア(チョコ/ゴールド) マスコットサイズ(約9cm) 各1,000円



- ⑤ クッキー(9枚箱入り) 600円



- ⑦ ボールペン(4色+シャープペン) 500円



- ⑧ マフラータオル(約115cm×20cm) 500円

- ③ エッササくんストラップ
(オレンジ/ブルー)
各500円



- ④ ゴルフマーカー 1,500円



- ⑥ スポーツタオル(約105cm×34cm) 1,000円



- ⑨ マグカップ 1,000円

購入方法

同窓会グッズの購入を希望される方は、FAX（ホームページに書式もあり）あるいはハガキに下記必要事項①～⑤を明記して、同窓会事務局までお申し込みください。

※商品の仕様・デザインは都合により変更することがありますので、ホームページにてご確認ください。また売り切れの際は、ご容赦ください。

●必要事項

①お名前 ②ご自宅住所 ③電話番号(日中) ④商品番号と商品名(色)、個数 ⑤合計金額

※ご自宅以外への発送を希望される場合は、**発送先ご住所・電話番号**も併せてご記入ください。

●送料について

商品は、着払いの宅配便にて発送させていただきますので、送料をご負担ください。なお、商品によってはメール便・レターパックにて発送することも可能です。お電話にてご相談ください。

●代金のお支払いについて

代金は先払いとなります。FAXあるいはハガキにてお申し込み後、「みずほ銀行」または「ゆうちょ銀行」の下記口座へお振り込みください。入金確認後、2週間以内に商品を発送させていただきます。なお振込手数料については、ご負担ください。

みずほ銀行 世田谷支店 普通8102510 日本体育大学同窓会 碓井 進
ゆうちょ銀行

振替貯金(振替口座) 00110-5-604219 日本体育大学同窓会

※ゆうちょ銀行の場合、入金確認に数日(3日～5日程度)かかりますので、ご了承ください。

【お申し込み・お問い合わせ先】

日本体育大学同窓会

〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1 日本体育大学内

電話：03-3704-0266 FAX：03-3704-1817

URL：<http://www.nittai-club.com/>

【表紙写真】日体大生の飛躍を祈念し、創立120年を記念して2012年8月15日に設置された「日体八咫鳥の風見鳥」。古代中国の説話にある太陽の中にある「金鳥(きんう)」と、日本神話で神武天皇の東征に際し勝利を先導したという「八咫鳥(やたがらす)」にちなみ、鳥を平和の象徴たる鳩にしてオリジナルの「日体八咫鳥」が誕生した。(東京・世田谷キャンパス前庭) 【題字】学校法人日本体育大学 理事長 松浪健四郎